

『参訂漢語問答篇国字解』(明治13年刊) に於ける 訳語の性格 : 九州方言との関わり

著者	園田 博文
雑誌名	言語科学論集
巻	2
ページ	132-121
発行年	1998-11-20
URL	http://hdl.handle.net/10097/30713

『参訂漢語問答篇国字解』(明治13年刊)に於ける訳語の性格

—九州方言との関わり—

園田博文

キーワード 中国語会話書 明治初期 訳語

九州方言 「ホガス」

要旨 明治初期に成立し刊行された中国語会話書である『

参訂漢語問答篇国字解』を資料として、この中に現れる訳語の性格を検討した。

その結果、九州方言と見られる語がかなり多く現れていることが判つてきた。その中の一語である「ホガス」について、語史を明らかにするとともに、中国語原文と対照し、『総訳亜細亜言語集』の訳と対比させることを通して、中国語会話書ならではの考察を行った。

はじめに

慶応3(一八六七)年、北京駐在英国公使館書記官であるトーマス・ウェードにより『語言自邇集』が刊行された。この北京官話で記された中国語会話書の日本語訳といえる

ものが明治の初めに2種刊行されている。以前、拙稿(一九九七)で論じた『総訳亜細亜言語集』(明治13~15年刊)と、今回取り上げる『参訂漢語問答篇国字解』(明治13年刊)である。

『参訂漢語問答篇国字解』(注1)は、編者福島九成の廈門滞在中(明治7年~11年)に書かれたもので、明治13年、東京と大阪の書肆から出版されている。序の中に日本語訳の方針を述べた部分があるので、見てみよう。

：惜夫、初學者未易暢曉也。茲不揣孤陋、譯以我邦音義、其與我邦語言不相符者、畧爲刪改、間補己意、共得百三章、付之剞劂。

(『語言自邇集』「談論篇」は)惜しいことに、初學者の者には、そのままでは理解できない。そこで、見識が浅いのも顧みず、我が国の言葉で訳し、原文が我が国の言語と噛み合わないものは、ほぼ削除し、代わりに、私自身が考えた文意を補って、もと百章のものを百三章にして上梓した。)。

右のような、日本全国の初学者に向けて書かれた日本語の訳文の中に、辞書に記載されたことのない言葉、あるいは、当時の他の文献にはなかなか現れないような訳語が認められるのである。本稿では、これらの語がどのような性格を持った語なのかを考察するとともに、これらの語を『参訂漢語問答篇国字解』を用いて論ずる意義、利点等について、検討してゆきたい。

一 訳語の性格について

これらの語の性格を考える際、編者の言葉の背景について把握しておく必要がある。そこで、福島九成が生まれてから、『参訂漢語問答篇国字解』（以下『参』）を著すまでについての略歴（注2）を記すことにする。

福島九成は、天保13（一八四八）年6月9日、佐賀藩士である漢学者福島文蔵（金立村出身、号金岡）の長男として、肥前（佐賀県佐賀市石長寺小路）に生まれ、幼くして漢学に親しんでいる。佐賀藩軍政事務に携わった後、明治元（一八六八）年、戊辰戦争時、奥州征討に従軍する。明治4年から明治6年にかけて清国に留学。その後、明治7年陸軍少佐となり、熊本鎮台在勤中、廈門駐在を命じられる。そして、明治13年に職を辞し帰国するや、直ちに、『参』

を出版する。この時、長崎県士族と記されているが、当時の長崎県は現在の長崎県と佐賀県を含むものであった。

以上のように、福島九成は、佐賀藩（藩領は現佐賀県と現長崎県に跨がる）出身者で熊本に住んだことがあることから、幕末明治初期における佐賀県、長崎県、熊本県を中心とした九州方言の影響を強く受けていることは、間違いないであろう。ただ、実際にこれらの言葉が訳語に反映されているかどうかは調べてみなければ分からない。まずは、「(1) 九州方言として特徴的な語」「(2) 九州方言であるとともに他の地域にも見られる語」の2つに分けて、九州方言との関わりがある語がどの程度現れているか調べたうえで、「(3) 辞書に記載のない語」「(4) その他の方言」に言及する。

なお、九州方言（注3）であるか否かの判断は、現在の方言（注4）で行い、『日本国語大辞典』（以下『日国大』）、『日本方言大辞典』、『現代日本語方言大辞典』、『長崎県方言辞典』を参考にした。

(1) 九州方言として特徴的な語

九州方言として特徴的な語が9語現れていた。以下に、用例を示す上での凡例を記す。

【No】訳語【中国語原文】意味。〈現在方言で使用している主

な県(同一語形、あるいは、相応しい意味が辞書に記載されていない場合は、「Ⅱ」を用い、辞書にある近い語形、意味を示した)〉

中国語原文。日本語訳文(頁)

それでは、見てみよう。

①ウチクヤス【壊】ぶち壊す、駄目にする。〈長崎〉

若有一點兒空子、就從中作弄、壞了人的事。

：ヒトノコトヲ、ウチクヤシテ、シマヒマス(201)

②ウツカル【打】ぶつかる。〈熊本Ⅱウツツクル〉

棍子已經打在腿肚上。

ボウハ、ハヤ、アシノフクラツパミニ、ウツツカリ(162)

③カセイ【照應・帮忙・帮理】手伝い。〈長崎〉

我家裡人、捨不得叫他去、留在家照應照應。…ウチエ

トメ、カセイナドサセテ、オキマシテゴザル(25)

④シユル【湯】汁。〈熊本〉

哥兒們請喫肉、泡些湯喫。

：シユルヲカケテ、オアガリナサレ(14)

⑤シユルシ【效】効果、効き目。〈長崎Ⅱ「印」の意〉

醫藥都不見效、越變越重。

イシヤモクスリモ、サツパリ、シユルシナク…(78)

⑥シリベ【認得有一個人】知人。〈長崎Ⅱ「顧客」の意〉

我認得有一個人、頗有年紀。ワタクシノ、シリベニ、ズイブン、トシノヒトガヒトリ、ゴザリマスガ(173)

⑦スミクラ【角】隅。〈長崎〉

那知道、你搬在這儘頭角那里。アナタガ、コノツキアタリノスミクラニ、オスマヒニナツテイヨウトハ、ナンノゾンジマセウ(23)

⑧タケブン【地步】見識、境地。〈長崎〉

雖然到不了他那個地步、也差不多。タトエ、アレダケノタケブンニハ、マイリマセンデモ…(154)

⑨マツキヤ【紅、カオヲマツキヤニナスⅡ翻臉】真つ赤。

他臉上紅了一陣。〈長崎〉

アレガ、イチジ、マツキヤナ、カホヲイタシ(191)

(2)九州方言であるとともに他の地域にも見られる語

⑩イツケ【族・一家】一族、親類。〈長崎・熊本〉

他是我的一個族兄。

ソノヒトハ、ワタクシノ、アルイツケノオトコデ(145)

⑪イップリ【做樣兒】恥知らず。〈熊本Ⅱイップリユウ〉

不要另做一個樣兒。

ベツニ、イップリヲタテズ(179)

12 オオユビ【大拇指】親指。〈長崎〉

早晚兒要仗着大拇指頭戴翎子咯。

イツカ、オホユビノサキデ… (158)

13 オキヤクブリヲスル【作客】客となる、もてなしてもらう、遠慮する。〈長崎〓オキヤクヲスル【もてなす意】〉
你在呐家、我還作客麼。コナタニ、マイツテ、

オキヤクブリヲ、スルモノデ、ゴザリマスカ (2)

14 カミゲ【頭髮】かみ、髪の毛。〈佐賀・長崎・熊本〉
漆黒的頭髮、纖纖的手指。

クロヒカミゲニ、ホソヒユビ (244)

15 キキイ【做各的事】その人その人の気持ち。〈熊本〓キギ〉
各自做各的事纔肯歇。メイメイキ、イニナツテ、

ハジメテ、クジヨウガ、ヤムノデ、ゴザリマス (289)

16 キバト【睜（開）】はつきりと。〈鹿児島〓キパット〉
他睜開眼瞧見我。

アレハ、メヲキバトアケテ、ワタクシヲミヤリ (76)

17 ケナイ・ケナイノモノ【家裡・家裡人】家族、一族。〈鹿児島〉
和他家裡人說話。ソノケナイノモノト、ハナシヲイタシ

テ、オリマシタガ (75)

18 シタアギ【下吧・下吧類】あご。〈長崎〓アギ〉
滿下吧有捲毛的鬍子。

シタアギイツパイ、チブレヒケヲハヤシ (167)

19 ズルイ【懶惰・疲】怠ける。のろい。〈熊本〉

不是故意的懶惰。

ワザト、ズルヒコトヲ、シタデハ、ゴザリマセヌ (233)

你的性太疲了、若不會做的事情、辭他不做就是、：

オマエハ、タイヘン、ズルヒムマレツキデ、ゴザリマス
ネ、モシ、デキナヒコトデ、ゴザリマスナラ、コトワツ
テ、ナサレネバ、ソレデヨヒノニ、… (257)

20 ダ(ガ)【誰】誰が。〈長崎〉

他多的出外、誰曉得纔回來。

…イマカエツテマイロウトハ、ダガゾンジマセウ (82)

21 チャチャクチャニスル【糟蹋】馬鹿にする。

〈長崎〓チャツチャクチャニスル〉

見着人、就當個話柄兒糟蹋我。

…ワタクシヲ、チャチャクチャニ、イタシマスガ (192)

22 チャノコ【點心】おやつ、朝食。〈佐賀・長崎・熊本〉
我洗了臉、喫點心完、纔要上衙門去。

…カホヲアラヒ、チャノコヲタベ、チョウド、シユツキ
シイタソウト、スルトコロニ (105)

23 ツカミホガス【抓】つかんで穴を開ける。↓後述。

24 ツラマエル【抓・拿】捕まえる。〈福岡〉

那一抓恰好抓住了。ヒトツカミデ、チョウド、
ツラマエハイタシマシタガ (121)

[25] トツツケモナイ【没頭没尾的】とんでもない。

〈長崎・熊本⇨トツケモナイ〉

話出沒頭沒尾的奢呆話。シリモカシラモワカレヌヨウナ、トツツケモナヒ、バカゲタコトヲ、イヒダシマシテ (206)

[26] ナガギ【袍】長い上着。〈熊本⇨ナガギモン〉

我穿好袍套。

ワタクシハ、ナガギニ、ハオリヲキ (105)

『日国大』では、「明治末期より用いられ、昭和初期に文部省の裁縫教科書に用いられてから一般化した。」とし、『野菊の墓』の例を挙げている。

[27] ネブリホガス【破】嘗めて穴を開ける。↓後述。

[28] ハカシヨ【埜地・墳院・院子】墓、墓地。〈長崎・熊本〉

他們的埜地在那兒。

アレノ、ハカシヨハ、ドコデ、ゴザリマス (84)

[29] ハシカイ【直】むずがゆい、ずけずけ言う。〈長崎〉

只是嘴太直。↓クチハジカイ参照。

タビ、クチガアマリ、ハシカクシテ (266)

[30] (ハラガ) フトイ【飽】満腹。〈熊本⇨ハラシフトカ〉

喫得那麼飽麼。オアガリナサツタトテ、ドンナニ、

オハラガ、フトクゴザリマスネ (2)

[31] フトイ【大・長大・(高)大】大きい。〈佐賀・長崎・熊本〉

到大了、文不成、武不就、那時候後悔也遲了。

フトクナツテブンガクモデキズ、ブケイモデキス、ソノトキニ、コウクワイイタシタトテモ、モハヤ、マニアヒマセヌ (126)

[32] フトル【大・到大・長得】大きくなる。〈長崎・熊本〉

就是長得像個樣、心地倒沒有一點兒明白。ソノミカケコソ、チヨイト、ヨウ、フトツテオリマスルケレド… (225)

[33] ホウベタ【腮】頰。〈長崎〉

雪白的臉、粉紅的腮。カホハ、ユキノヨウニシロク、ホウベタニ、ホンノリト、アカミヲフクミ (244)

[34] メタタク【メタタクウチニ⇨一瞋眼・一轉眼】瞬きをする。〈長崎・熊本⇨メタタキ〉

一瞋眼的時候。メタ、クウチニ (113)

[35] メバタキ【メバタキモセズ⇨眼巴巴兒】瞬き。〈大分〉

就天天眼巴巴兒盼望着。タトエ、マイニチ、メバタキモセズ、ノゾンデイタコロガ (177)

[36] メブタ【眼皮】まぶた。〈鹿児島〉

你不怕人背地裡說、你是眼皮淺的人麼。…メブタノアサヒヒトダト、イフテモ、オカマヒナサレヌカ (265)

[37] ワキ【別處】余所。〈熊本〉

我還要到別處去。

ワタクシハ、マダ、ワキニマイラネバ、ナリマセヌ (2)

以上、37語が現在の九州方言に見られる語であり、しかも、この内の9語は、九州方言特有のものであった。この他にも、「オトト【兄弟】」「シヌノウ【收下】」「チョダイ【領】」「ボシ【帽子】」のような短呼例、「オガシク【可笑】」「カゲル【缺】」「トグジツ【老實】」「ハジメデ【纔】」「マコドニ【狼】」「ヨジアジ【好歹】」「レギダイ【累朝】」のような濁音化例が見られる(注5)。これらは、九州方言の特徴でもある。福島九成の生い立ちをも考え合わせると、実際に使っていた九州方言が現れたと考えるのが妥当であろう。

(3) 辞書に記載のない語

[38] アチャアチャアチャアチャ【結結吧吧】しどろもどろに。
説話結結吧吧的。

モノライフニ、アチャアチャアチャアチャイフテ (205)

[39] クチハジカイ【嘴直】ずけずけと物を言う。

我嘴直的病、我自己知道。

ワタクシノ、クチハジカヒビヨウキハ、ワタクシジブン

ニモ、ゾンジテオリマスガ (267)

[40] ジカキガミ【字紙】字を書いた紙。

敬惜字紙做甚麼。ジカキガミヲ、タイセツニイタシ、オ

シンデ、ドウイタシマス (129)

[41] 下シゼキ【序齒】年齢によって順序を決めること。

咱們序齒、一溜兒坐下喫。オタガヒ、トシゼキニ、ヒト
マトメニ、コシヲカケ、タベマシヨウ (14)

[42] フスグレ【不爽快】すぐれない。

我的身子也不爽快、狼獾怠動。ワタクシノカラダモヤハ
リ、フスグレデ、マコトニ、タイギデナリマセヌ (62)

[43] ヤマアナタ【山後】山の向こう。

又看見他在山後跑去。

：ヤマアナタニハシツテ、クダリユクノヲ： (125)

辞書に記載のない6語については、オノマトペである [38]「アチャアチャアチャアチャ」を除いては、[39] [43]は、それぞれ、「クチ+ハジカイ」「ジ+カキ+ガミ」「トシ+ゼキ(年席)」「フ+スグレ」「ヤマ+アナタ」というように、既にある複数の語を組み合わせた臨時の一語を作ったものと思われる。福島九成独特のものかどうかは、他の文献に広く当たってみなければならぬ。

(4) その他の方言

九州方言としては未確認であるが現代の方言に見られる

語を示すことにする。これら以外にも、方言あるいは俗語に近い語は相当数現れている。

[44] アヤカス【弄空】本物らしく見せ掛ける。(山口)

做個虚架子、全是弄空的。マツタク、ウワベヲカザツテ、ハラニ、ナヒコトヲ、アヤカシテイマシタノデ(196)

[45] アトヒザリ【倒退】後退り。(三重)

臨走的時候、倒退着走出去。カエロウトスルトキ、アトヒザリヲシテ、デ、ユキマスユエ(207)

[46] サシクル【勻】遣繰りする。(岡山)

他萬不得已、勻着空兒教我們。…ヒマヲサシクリ、ワタクシドモニ、オシエルノデ、ゴザリマス(146)

[47] シダラナイ【不像樣・沒規矩】だらしない。(島根)

你自己不覺得這不像樣的樣子。オマエハ、ジブンデ、ソノシダラナヒザマヲ、ゾンジツキナサルマヒガ(223)

[48] シヤベツ【シヤベツナク】不分。區別。(兵庫)

不分晝夜的這樣飲酒。ヒルヨルノシヤベツナク、ソンナニ、サケヲオノミナサツテハ(238)

[49] シンバリ【シンバリヲカル】楷。柿渋を塗った紙(島根)

夏天的時候、有一夜楷着窓子睡。
アルナツ、イチヤ、マドニ、シンバリヲカツテヤスミマシタソウデ、ゴザリマスガ(118)

[50] ハタタガミ【霹靂】雷。(京都)ハタガミ
打了一個霹靂。ハタ、ガミガ、ナリイダシ(105)

以上、(1)九州方言として特徴的な語9語、(2)九州方言であるとともに他の地域にも見られる語28語、(3)辞書に記載のない語6語、(4)その他の方言7語、併せて50語を示してきた。(1)と(2)を合わせた37語は、実際に九州方言と考えられることも述べた。

この他にも、イツサクサクバン【前兩天晚上】のように、『日国大』に立項されているが、例が載っていないような漢語も、会話文の中に見られる。

二 会話文中における語の解釈

これまでの検討で、『参』には福島九成の生まれ育った九州の方言が多数現れていることが判ってきた。

文献を利用した九州方言の研究には、九州方言学会(一九九一・初版は一九六九)、奥村(一九八九)があり、かなりの文献について調査が進んでいる。国内資料はもとよりのこと、蘭学資料、唐話資料、中国資料、朝鮮資料等を用いた研究が盛んである(注6)。

ただ、明治初期に九州方言の記載されている資料がさほ

ど多くないなかに、『参』には、従来九州方言として言及されてきた語（「フトイ」「チャチャクチャニスル」等）が多数現れているのに加えて、従来言及されてこなかった九州方言（「タケブン」「マツキヤ」等）も認められる。

そこで、先行研究もある「ホガス」（前掲の[24]ツカミホガス【抓】、及び、[28]ネブリホガス【砕破】）という語を例として、九州方言としての用法を、中国語の原文と対照させ、『総訳亜細亜言語集』（以下『総』）（注7）の訳と対比させながら、中国語会話書ならではの利点を活かし、考察することにした。今後、このような研究を積み重ね、文献による九州方言の研究を更に発展させてゆきたいと思っている。

（1）「ホガス」の語史

「ホガス」という語については、『ゾーフハルマ』の中の九州方言について論じた坂梨（一九九三）に指摘があり、九州方言であることが明確になっている。以下、文献例に関しては坂梨（一九九三）を参照した。

「ホガス」は、『日国大』を引くと、「穴をあける。削って穴を作る。うがつ。」とあり、『日葡辞書』（以下『日葡』）の例を挙げ、現代の方言として（佐賀、長崎、熊本）

等を挙げている。例を見てみよう。

① Fogaxi, u, aia. ホガシ、ス、イタ 穿孔する、すなわち、孔をあける。下（X）の語。

「下の語」とは、九州方言のことを指す。

更に、「ウチホガス」という複合語も載っている。

② Vchifogaxi, su, aia. ウチホガシ、ス、イタ 叩きつけて孔をあける。

この他、『ゾーフハルマ』に「ホガス」、『和蘭字彙』に「突キホガス」「踏ミホガス」が見られるという。

また、九州方言学会（一九九一）には、『葉隠』（注8）や志津田藤四郎『蒲原大蔵戯作集』という佐賀の資料に例のあることが示されている。例を見てみよう。

③ 真の道を祈りて不叶事^{かなわぬ}なし。天地もおもひ^すほがすもの也。紅涙の出る程に徹する所^{すなわち}則^{すなわち}神に通ずるか^{ぜんぜられ}と被^{ぞんぜられ}存候。（『葉隠』239頁1行（日本思想大系26））（注9）

以上、「ホガス」という語は、室町時代に九州方言であり、江戸時代に長崎や佐賀の方言資料に用例が見られる語であることが判った。佐賀出身である福島九成が、この「ホガス」という語をどのように訳語として用いているか、『参』に現れた例で検討してみよう。

（2）「ツカミホガス【抓】」について

『参』には、「ツカミホガス」という表現が2箇所現れている。ともに、41章「隔窓捕雀」の例なのだが、文脈がないと分かりづらいので、冒頭の部分を長く引用することにする。例を見てみよう。

④ 噯呀、這冷天誰把那窓糊紙、抓了這麼大窟窿呢。

オヤオヤ、コノサムヒテンキニ、タガ、ソノマドノカミヲ、ソナオホキナアナニ、ツカミホガシマシテゴザルネ (120)

この質問に対し、以下のように答えている。

⑤ ソレニハ、オカシヒハナシガ、ゴザリマス、オキカセモウシマセウ、ダビイマ、ワタクシハ、コチラニ、コシヲカケテイマシテ、アノマドノサンニ、スゞメカイッピギ、トビオリテキタノヲ、ミアタリマシタガ、ヒデリニ、ソノカゲガウツリ、ピンピントンデ、オリマズノデ、ワタクシハ、マドノウチデ、ソロソロ、ヌケアシライタシテ、ソノワキエマイリ、 (120)

⑥ 隔着窓糊紙一抓、抓了這大窟窿啊。

マドノカミノコチラカラ、チヨイト、ツカミマシタガ、コンナオホキナアナヲ、ツカミホガシマシテゴザル (121)

つまり、「部屋のなかに居ると、雀が飛んできて障子の棧の上に止まった。日が照っていたので、障子紙にその影

が映って見える。部屋の中から、障子紙を隔てて雀を捕まえたなら、障子に大きな穴が開いた。」という話である。

『総』では、第40章が対応しており、「抓」は1箇所現れている。例を見てみよう。

⑦ 隔着窗戸紙兒一抓、把窗戸抓了個大窟窿。

障子ノ紙ヲ隔テ、一^{ヒツ、カマエ}抓タラバ、障子ヲツカンデ、大キナ穴ヲアケマシタ (40章)

以上、中国語文をも考慮し、『参』と『総』の違いを参考にまとめると以下になる。

中国語の【抓】は、「ひつかく」「つかむ」という意であり、「穴を開ける」という意味はなく、『中国語大辞典』等にも、この意は載っていない。一方、中国語の【窟窿】は、「穴」のことであるので、【抓窟窿】という動賓連語になって、はじめて「(雀を)つかんで穴を開ける」という意味になる。しかし、【抓窟窿】だけでは、どのような状況か想像するのは難しい。④⑤⑥と挙げてきたような文脈のなかで、正確な解釈が可能となるのである。

比較しやすいように、【抓大窟窿】の部分の訳のみを記すと以下になる。

- ⑧ 抓大窟窿 オホキナアナニ、ツカミホガス (『参』)
- ⑨ 抓大窟窿 オホキナアナヲ、ツカミホガス (『参』)
- ⑩ 抓大窟窿 ツカンデ、大キナ穴ヲアケル (『総』)

【抓窟窿】という動賓連語を福島九成は「ツカミホガス」と訳している。このような複合動詞は、『日葡』や『和蘭字彙』などの例から考えても、九州方言として、ごく自然なものだったのであろう。一方『総』の広部精は、共通語的な「ツカンデ、アケル」と訳している。

(3) 「ネブリホガス【舔破】」について

次に、『参』第10章「託人説情」の「ネブリホガス」という例を見てみよう（これには、『総』の対応例はない）。

⑪ 我上了台階、悄悄兒把窓糊紙舔破、一瞧屋子裡頭、

大家坐着飲酒、…。

ワタクシハ、アガリダンニ、アガリマシテ、コッソリト、マドノカミヲ、ネブリホガシ、チョイト、ウチノヤウスヲ、ノゾキマシタラ、オホゼイ、セキニツキ、サケヲノミ、… (31)

これは、先程の【抓窟窿】よりは分かりやすい状況である。中国語の【舔】は、「嘗める」という意であり、【破】は、「破れる、穴が開く」という意で、【舔】の結果補語となっており、【舔破】で「嘗めた結果穴が開く」という意味になる（当例は【把】を受けて「嘗めて穴を開ける」という意味である）。

このような、【舔破】を「ネブリホガス」と複合動詞で訳しており、中国語の構造と似通っているが、【抓】の訳をも考慮すると、偶然九州方言の言い方と合致したのであろうと推測できる。つまり、福島九成が中国語に影響されて、不自然な複合動詞を作ったのではないと考えてよいだろう。因みに、共通語で「ナメアケル」という複合動詞は不自然である。

『参』の会話文中に現れる「ホガス」という語を、中国語原文と対照し、『総』の訳と対比させることにより、考察してきた。

佐賀の地で、長く方言として使われてきた「ホガス」を複合動詞として、【抓窟窿】【舔破】の訳語に用いているが、これは、中国語の表現とも似通ったものであった。一方、『総』の編者広部精は、共通語的な「ツカンデ、アケル」という訳し方をしている。

まとめ

以上、『参訂漢語問答篇国字解』に現れる訳語について検討してきた。この中国語会話書には、現在の九州方言に見られる語が37語現れており、しかも、この内の9語は、

九州方言特有のものであった。これらは、福島九成の生い立ちなどから考えて、当時実際に使われていた九州方言が現れたと考えられる。

それでは、何故日本全国を視野に入れて書かれたにも関わらず、これほど多くの九州方言が認められるのであろうか。方言を駆使しようとしたのではないことは明白である。恐らく、日常慣れ親しんでいる言葉が、知らず識らずのうちに現れたもので、福島九成自身には方言との認識がなかったものではないかと思われる。

このほか、辞書に記載のない語や、その他の方言、俗語の類も数多く認められた。辞書に現れない語については、オノマトペであったり、臨時に作られた一語であるとの分析を行ったが、これらの語については、今後更なる調査、検討が必要であろう。

後半部では、「ホガス」という九州方言を例として、中国語原文との対照、及び、『総訳亜細亜言語集』の訳との対比を通し考察した。【抓窟窿】【舔破】の訳語に用いられた複合動詞としての「ホガス」の用法が中国語の表現とも似通ったものであることや、広部精の訳と異なることを等指摘した。このような方法は、中国語会話書を利用することで初めて可能になるものである。

今後、「ホガス」一語に限らず、今回提示した多数の語

について、文献による九州方言の研究を行うとともに、明治初期の共通語、あるいは、武家言葉との関わりについても考察する予定である。

【注】

(1) 『中国語教本類集成』第1集第2巻(不二出版) 所載の複製を利用した。

(2) 『郷土出身興亜先賢列伝』(大政翼賛会佐賀県支部発行)、『対支回顧録』(明治百年史叢書第69・70巻)、『百官履歴』(日本史籍協会叢書第175・176巻)、『幕末明治海外渡航者総覧』ほか、各種人名辞典を利用した。『参』の成立時期に関しては六角(一九八四)を参照した。

(3) ここでいう方言とは、加藤(一九八二)で解説されている「俚言」⑧タケブン【地歩】等)、「訛語」③④メタタク【メタクウチニ】一瞋眼・一轉眼】等)、及び、「義訛語」①⑨ズルイ【懶惰・疲】等)を指すものとする。

(4) 『参』は明治初期に成立したものであるから、当時の九州方言であるかどうかを調べなければならない。ただ、明治初期当時の九州方言を網羅した辞書はないので、決して十分とはいえないが、現在の方言を抛り所にせざるを得ない。このような方法は、奥村(一九八九)等の先行研究でも使われている。

(5) このほかにも、様々な音韻上の特徴が認められるが、九州方言との関わりという点では、もう少し考察する必要がある。例えば、金子(一九九七)で、『沖縄対話』に「マエル」という語が現れているという指摘があるが、『参』にも以下のような「マエル」の例が3例見られる。

⑫ 因此歩甲們趕緊把他捆了去、昨天送了刑部。

ソレデ、トリテノモノドモガ、スゲニ、アレヲシバツ
 テマエリ、サクジツ、サイバンシヨニ、マワシタソウ
 デ、ゴザリマス(284)

(6) 蘭学関係では、『ゾーフハルマ』のような個別の文献の研究として、杉本(一九七八)、坂梨(一九九三)が挙げられる。なお、「中国資料」という場合、中国で中国人により作られた資料を指すようなので唐話資料とは別にした。

(7) 今回対比する巻4「談論篇」は、明治15年刊であり、『語言自邇集』の「談論篇」全100章のうち第1章から第50章までの訳がある。

(8) 『葉隠』は、佐賀藩士山本常朝の談話を同藩の田代陳基が聞き書きし、享保元(一七一六)年に成立したとされる。

(9) 「おもひほがす」の頭注には「思い通りに動かすことができる」とあるが、「思うことにより穴を開ける」つまり「(天地に) 思いが伝わる」と解釈したい。

【参考文献】

- 奥村三雄(一九八九)『九州方言の史的研究』
- 加藤正信(一九八二)「方言語彙の概説」(『講座日本語の語彙8 方言の語彙』明治書院)
- 金子弘(一九九七)『沖縄対話』の明治東京語」(『日本語の歴史地理構造』明治書院)
- 九州方言学会(一九九一・初版は一九六九)『九州方言の基礎的研究 改訂版』風間書房
- 坂梨隆三(一九九三)『ゾーフハルマ』の九州方言」(『鶴久教授退官記念国語学論集』桜楓社)
- 杉本つとむ(一九七八)『江戸時代 蘭語学の成立とその展開Ⅲ —対訳語彙集および辞典の研究』早稲田大学出版部
- 園田博文(一九九七)「明治初期中国語会話書の日本語—『亜細亜言語集』『総訳亜細亜言語集』を中心に—」(『文芸研究』144)
- 園田博文(一九九八)「中国語会話書における助動詞「です」の用法について—明治10年代を中心に—」(『国語学研究』37)
- 村上雅孝(一九九七)「近代語史における『訳文箋蹄』の意義」(『国語研究6 近代語の研究』明治書院)
- 六角恒廣(一九八四)『近代日本の中国語教育』(不二出版)